
Sさん家の穀潰し

反兎 相

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sさん家の穀潰し

【Nコード】

N5372Y

【作者名】

反兎相

【あらすじ】

母子家庭のSさん家。

今でいう二ートの娘が穀潰しを卒業するまでの娘と猫との奮闘？

これが我が家の穀潰し

俺はSさん家で飼われてるネコだ。

この家の家族は全部で5人。母親、兄貴、妹。

そして俺の母ちゃんと俺。

母ちゃんの名前はミーちゃん。俺の名前はチビちゃんだ。

(ありきたりな名前…)

この家族、見て分かる通り母子家庭だ。

一般家庭と違い片親というのはそれはもう本当に大変な事なのだ。

それなのにこの家の子供ときたら……

普通、母子家庭で育つたりしたら母親の苦勞を知ってるし母親の為にと頑張るものだが、

まあーこの兄妹、2人ともが穀潰し。

何と可哀相な母親。

(同情するよ……)

兄貴の方は今はバイトとはいえ働いてる分、娘よりマシだ。問題なのはこの娘。今年で26になるというのに家でダラダラ穀潰し。

母親は何も言わないのかって？

母親は兄貴の、今でいう二ートで慣れてしまい感覚が麻痺してしまつて娘の二ートに寛大だ。

(何てことだ!!!この世も末だ……)

娘に甘い！！激甘だ！！

元々女の子が欲しかったという理由もあるかもしれないが…甘すぎにも程がある……………。

誰もこの娘に言わないから俺が言う。

何か引つかりがあるかもしれないが…気にせずいこう！！

実は何故かこの娘にだけは俺の言う事が伝わる。ハッキリ言えば話せるのだ。

お前は猫じゃないのかって？確かに俺は猫だ。だったらそんなの現実にはありえないって？そういう方が夢があつていいじゃないか。

だから俺はいつものようにこう言うー

「お前いい加減にしろよ！！」

娘は口いっぱいに食べ物をはうり込んだ顔で俺を見る。もぐもぐしながら、

「言われなくても分かつてるよ……………」
とぶーたれる。

「言わねーと分かんねーから言つてんだろ！！豚みたいにバカバカ食いやがって…豚だつてそんなに食わねーぞ！！」

「そっ…豚より食つてないわ！！」

「そういう問題じゃねーんだよ！！……………お前いつまで穀潰ししてん

だよ？」

こう聞くと大体

「うう〜…」

と言って黙り込む。そして考えてるフリをする。

そうフリだ。

実際この娘はちゃんと考えていない。考えていればこんな事にはなつてない。

「あ、明日からちゃんと断食するから…今は思う存分食べさせて。

お願い！！」

いつもこれだ…。

「明日から今日で最後」とこの世の終わりのように食いまくる。

もう呆れて物も言えない……………。

この娘。ダイエットに取り憑かれている。いや、ダイエットというより外見だ。

痩せれば自分がマシに見えると思ってやがる。

そんなに外見気にしてんなら、とつととダイエット成功させるよ！

！と思うが、なんせこの娘は意志が弱い…………

ある程度痩せてもリバウンドしてしまう。しかも痩せ方に問題があるは、リバウンドの繰り返しだはで…………相当な悪循環だ。

（身体に悪いよなあ〜）と思いながらも忠告するが、へんな所で我が強い。というより意固地なのだ。

そんなこんなを専門卒業してから5年間も繰り返している…………、

「5年もあれば痩せれただろうがー！ー！」と、ただただ怒るばかりだ。

でも何故かほつとけない…………

俺以外にコイツを立ち直せるやつなんて居ないと思うから…………。

娘は自己嫌悪に陥り頭まで毛布を被って横になっている。

(コイツも自分で駄目だとは分かってんだよな……)

何だかあまりにも可哀相に感じて慰めようと近付くと、

すーぴい、すーすー…

(コイツ……寝てやがる!!!)

落ち込んでるのかと思いきや、腹いっぱいになって満足して寝てやがった!!母親は一生懸命働いてるってえーのに、このバカ女は!!!

もう呆れて物も言えない……

起こす気にもなれず……、とりあえず俺も寝た。

今日も相変わらず穀潰し。いつになったら卒業してくれることやら……。

引きこもりの原因！？

ごくつぶし 「穀潰し」
食べることは一人前だが、定職も収入もなくぶらぶらと遊び暮らす者。

うちの穀潰しの娘は穀は潰すが、ぶらぶらとはしていない。

(女だけに…プツ…(笑) 下ネタのつもり)

…うちの穀潰しは引きこもりだ。

ほとんど家から出ない。

月に1、2度出ればいい方だ。

引きこもりの原因は5年前ぐらいに行った海外旅行にある。

それから帰って来てから何が原因でそうなったのか娘の顔は、まあ酷いぐらいに荒れた。

できもの、ブツがぶわあああとできていた。

これが元々、引きこもり性質があったあの娘を駄目にした。

だが、もうその海外旅行の残骸のできもの達もほとんど良くなって
る！…

今はどちらかというとずばらに生活しているせいで肌荒れしている
…。

この娘…女とは思えない程ずばらだ……。

穀潰ししている時は何故か風呂に入らない、歯は磨かない、起きても顔は洗わない……

（だから肌荒れするんだよ！！）

太っている自分が嫌で自信がないから引きこもっている。

なのに穀潰し……。

大体この娘のダイエット方法がよくない。

飲み物ならOKの断食だ。

「断食するぐらいなら量減らしてダイエットしろよ」と言つと、

「量減らしてダイエットするぐらいなら断食のほうがマシ！！だってちよつとでも食べると食に拍車がかかるんだもん……」

「……………」

（ならとつと断食成功させて痩せるやあー！！）と心の中で叫んだ。

なんでも断食にこだわる理由は他にもあつて、目標体重まで断食を貫ければ意志が強くなると思っているのだ。

結局は、意志が弱いからいつまで経っても穀潰し。

だがこの駄目娘。一度、奇跡的に痩せた事がある。（本人も驚いていたのが笑えた。）

本当にあれは奇跡だったな。

まあリバウンドしたんだから意味はない。

この娘は「痩せない」と思って逆に食の事を考えて悪循環。
断食成功させても次の日とかに普通にがつり食っては太っての繰
り返しで悪循環。

悪循環にも程がある。

いい加減、学習してもらいたいものだ。

今日もうちの娘は穀潰し。

いつになったら卒業してくれる事やら。

住めば都と言いますが…

俺はチビという名の茶トラの雄猫だ。俺の母ちゃん共々、現在Sさん家で飼われてる。

ここの家は3人家族で母親、兄貴、娘の3人家族で見ての通り母子家庭だ。

この家の可哀相な所は母親は一生懸命働いて2人の子供を育てたのに、その子供がろくでもないという事だ。

兄貴の方はまだバイトしてる分いいとして…

問題は娘の方だった。

穀潰しなのである。それも引きこもり……
今でいうニートだ。

だがこの家族、県営住宅⇨県住⇨団地に住んでいて、部屋は開けっ放しなので娘が自分の部屋に一人で閉じこもって家族と顔を合わせないという事はない。

娘の定位置は3つある部屋の台所の隣にあるテレビの配線がある部屋のテレビの前の一畳とちよつとだ。

その周りには山のように物がある。
それを挟んだ隣に母親の寝所がある。

兄貴の方はもう一つ同じ大きさの部屋に箆笥とたくさんの方に囲まれている所が定位置。

みんな寝場所が一畳ぐらいしかない……。

もう一つ三畳の部屋があるがそれは兄貴の漫画類その他諸々で、あ
かずの間になっている。

とにかくこの家には物が多い。

みんな捨てられない人間なのだ……。

(同じ月生まれだからか……?)

俺の母ちゃんの定位置はダイニングテーブルの背もたれのあるイス
の上。

そして俺の居場所は母親のたたんだ布団の上、ここは娘との会話が
しやすく居心地がいい俺の特等席だ。

今日もうちの穀潰しは昼だというのにガス力寝てる。

「おい!!もう昼だぞ。起きろよ穀潰し。」

一応声はかけてみた。だが娘は起きる気配もない。

(昨日何時に寝たのか知らねーが……何時間寝るつもりなんだよ……)

もう冬が近付く季節。

できる事なら外には出たくない……。
この穀潰しをからかって遊びたい……。

(早く起きろよ!ヒマだろーが……!!!)

兄貴は働いて（バイト）いるが、朝だけなので昼頃には帰って来て
る。

なのであまりニャーニャー言えない。

（猫だつて気を使う！）

俺は「早く起きろ〜」と娘に念をおくつた。

起きろ〜起きろ〜起きろ〜…

ピクツと娘が動いた。

（お！通じた！！さすが俺。）

娘は両手をバタバタさせてケータイを探す。

起きたばかりでまったく開かない目でケータイを見る。

（どうせ何も来てないだろ。）

娘はケータイで時間を確認すると、

「やばあ…もうこんな時間！？どんだけ寝るんよ……。」

と言いながら、また寝た。

「オイイイツ！！？さすがに猫でもそこまで寝ねーぞ！！！」

兄貴に気を使っていたはずなのに…あまりの呆れで、そんな事も忘
れて叫んでいた。

「いい加減起きろよお…穀潰しいー！！！」

娘は結局、夕方まで起きなかった。

娘の取り柄？

今日もうちの穀潰しは元気よく穀を潰している。

ほんと元気よく……

これだけの不摂生な割に体調を壊したりしない。

この家族、頭が痛くなる事はあるが、あまり病気をしない。いたって健康だ。

(いうならば取り柄は健康だけか!?)

まあ何か一つぐらい良いことがないと救われない。

テレビ見ながらむしゃむしゃ食べている娘を見て

「お前絶対痩せる気ないよな……」

娘はチラッと俺を見て

「そんな事はない!!」

と強気で言う。

「どこがだっ!!!!」

「痩せる気はあるもん。ただ食の誘惑に負けてしまっただけよ。」

(それじゃあ駄目だろ……)

本当あー言えば、こー言う。

聞き直りもいいとこだ。

どう見ても「痩せよう」としているようには見えない。言う事と行

動が伴ってなさ過ぎにも程がある……

「お前さあ家でダラダラしてるから太るんだぞ。働かざる者食うべからずだ!!」

「ぐっ……ネコのくせによく知ってる……」

「お前の目標にそう書いてあるだろ」

（何がネコのくせによく知ってるだよ…バカか）

「あ…本当だ。えへへ…」

笑って誤魔化そうとしてる。

この娘は食べちゃあ目標書いては書き直して…

（紙の無駄）

キレイに書けたと思ったやつは何故か取っておくからまたゴミが増える。

「そんなんで誤魔化せると思うなよ」

「ですよ。へへへ……。あたしだって働きたいよ、でも働くと何でかストレス感じてんのかバカバカ食って太るんだもん!!」

確かに…

去年の夏に行った、たいして仲良くない友達の家短期バイトを手伝った時は見事にデブってた…。しかもこの時、夜に居酒屋みたいなスナックでも働いていたから、掛け持ちしてたのが倍のストレスを感じたのか……

（よく眠たいのに寝れないって言ってたな……）

こいつの場合、大抵腹いっぱいになればこてんと寝れる。だからいつもより余計に食ってたのかも。

（それに去年は色々ありすぎたから…）

そう思うと休ませてやるべきなのか……
とか考えてしまうが……

「お前仕事辞めてから、もう半年以上経ってんだぞ！十分休んだだろがあ……！」

「うわぁ！？もう半年も経ってんの？はぁ……月が経つのは早いよねえ〜本当。」

「そっちじゃねーよ！！お前反省してんの！？」

「反省はしてるよ、そうは見えないかもしれないけど……」

「一生懸命働いてる母親の事思ったらこんな事できねーだろうが！！！」

娘は何も言い返さなかった。というより言い返せなかったんだと思う。

娘はあからさまに落ち込んだ。

(ヤバイ……これはさすがに言い過ぎか？いや、そんな事はない！！俺は真実を言ったまでだ。悪いのはこの娘！)
と思いつつも罪悪感は否めない。

(何で俺がこんな罪悪感、感じなきゃいけねーんだよ……悪いのこイツなのに……)

とりあえず、悪くはないが謝ろうとした時……

「お……も……さん……」

「は？」

いきなり訳の分からない事を言い出した。

「お相撲さん……！」

「はぁ！？」

もう本当に意味が分からない…。

「どういう意味っすか？」

呆れて気の抜けた言い方になる。

「お相撲さんになりたい！！」

「はぁ！？」

「だってお相撲さんって朝稽古して昼ガッツリ食いまくって昼寝するのが許されてる仕事なんだよ！！あたしみたいな穀潰しにはうってつけな仕事だよ！！」

何故か微妙に興奮気味に語り出す娘。

「…だから？」

「女は相撲できないってのはどうかと思わない？これって差別でしょ???何で女は駄目なわけ!？」

「いや…そんなの俺に聞かれても…。」

「胸出せないから?上に何かつけると醜いから??太った女は醜いから?」

もうここまでくると意味が分からない。

「分かった!!女は妊娠するから使い勝手が悪いからか!!」

「もうどうでもええわ!!」

自分が駄目な事を棚に上げて、変にプラス思考な穀潰しでした。

娘の夢

実はSさん家の穀潰し娘。この娘には夢がある。

何と（何と？） - - -

漫画家だ！！

（絶対なれねー（笑））

こんな穀潰しの駄目人間が漫画家になれるなら誰だって漫画家になれるよ。

（他に漫画家目指してる人間に謝れ。）

夢を叶えるつもりがあるのか……

今日も穀を潰している。

この娘が穀潰しをしている時は漫画に集中できてないという事だ。だから断食してる時はまあそこそこしてる程度だ。穀潰しをしてないだけまだマシだが……
（だいぶ頑張れよ……）と思う。

なんせこの娘、集中力が皆無である。

来月で26になるというのに情けない。

娘の夢は兄貴の影響が強い。

小さい頃（小学生くらい）は母親が帰ってくるのが遅くてテレビの主導権は兄貴にあった。

兄貴はハッキリ言ったらオタクだ。

だから娘も見事にオタクの道を進んだ。

だが思春期というものがやってきて、オタク＝恥ずかしい、みたい
に思うようになってしまい。

「漫画家になりたい」という夢はいつの間にか娘も気づかぬうちに
消え去っていた。

高校時代もしかし。

就職するのが嫌で化粧するのが好きだったのでメイクの学校に行
こうと思いい進路説明会に行った。

そこで専門学校の授業料がバカ高い事を知り、1番安いところにし
たら美容の専門学校だった。

この専門学校はメイクの授業もあつたので勘違いをしてしまつた
のだ。

（思い込みが激しいバカ…）

専門学校は大阪のにした。

母親には「ここにもあるよ」と言われたがどうしても家を出たかっ
たのだ。

理由は兄貴が嫌いだったから。

この時の兄貴は今の娘と同様穀潰し、そして兄貴には性格に難があ
った。

というわけで大阪の専門学校に通う事になった娘。

この専門学校には寮があったので寮暮らしをする事になった。最新は順調だった。寮で出来たグループに一人やっかいな人間がいてグループは分裂、寮の部屋の相方は決められたものだったので、いろいろ不平不満が出てくる。

その人数が多かったら部屋の相方を変えろという事がある。

娘の最初の相方は辞めてしまったので一人部屋になっていた。

この時はまだやっかいな子とも仲が良く、このやっかいな子（面倒臭いのでこれからは疫子）と一緒に部屋になる事になった。

これがグループ分裂のきっかけだったのかもしれない。てかさうだ。

もうこの時の部屋の雰囲気ときたら……

娘にも問題があったのだらうが疫子の一方的な険悪ムードだった。

この疫子人を嫌いにさせたら世界一だった。

娘はこれを予知していたのか、部屋替えの時にやりたい相手の名前を紙に書くんだったか……

娘は書かなかった。

疫子と一緒に部屋になると約束していたのに……

一度、部屋替えをしてしまったらもうする事は出来ない。だから無断で部屋替えした。

次の子は娘と仲のいい子だったが、娘はこの時に察した。

他人とは一緒に暮らせない。

（まあ家族ともまとともに暮らせていないのだから当たり前だ）

いくら仲が良くても不満は出てくるし、関係を壊したくないから言いたい事言えないし、なんやかんやと溜まってしまう。
(女は八方美人が多い)

で、娘は結局2年目には一人暮らしを始めた。

娘が寮生活で学んだ事は「負の感情」は人に伝染しやすいという事。

なんやかんやとダラダラしながらも無事専門を卒業した。

国家試験は学科一度落ちたけど……(二度目に受かった)

そして、

娘は自分には美容師は無理だと分かった。

あまりにも志しがなさ過ぎる。

生半可な気持ちで美容師はできるもんじゃない。

二度目の学科を受けるまでに部屋にこもって勉強していた時に何年かぶりに絵を描いた。

凄いヘタクソだった。

だがその時に、やっぱり漫画家になりたいと思ってしまったらしい。

思っるのは勝手だ。

俺には娘が本気で漫画家になりたいと思ってるようには思えない。

(俺は娘が漫画家になれないに一票!!)

だって、今だに穀潰しをしている。

この娘はバカだから遠回りをしないと駄目なのかもしれない。

だから俺も気長に待つ事にする。

まあ頑張れよ穀潰し。

(いや、マジでもう少し本気で頑張れ!!)

猫だつて大変だ！！

俺はSさん家で飼われてる猫だ。

名前はチビ。雄、茶トラ、のごくありきたりな猫だ。

だが俺は――――

実はしゃべれる。(他の猫もしゃべってるんだが…)

この家の娘には俺の言葉が通じる。

猫と人間とで会話ができるのだ！

だから俺は今日も言う。

「美味しそう……」

晩ご飯の用意が着々と進んでいつている。食欲を誘ういい匂いが漂ってくる。

さっきのは、出来上がったおかずを見て相変わらず穀潰しな娘が言ったセリフだ。

この娘、今のところ断食が続いている。

(と言ってもたった2日)

だが俺が見た所、今日あたりで飯に手を出すはずだ。

「本当に美味しそうだね……」

ゴクリと唾を飲みながらおかずを見ている。

「美味しいよぉ」

料理が出来上がり味見ついでにおかずをつまんだ母親がけしかける。

娘は頑張って食欲を抑えようとしていたが……

我慢仕切れず、やはり俺の読み通りおらずに手を出した。

(やっぱりな。わかちやいたが……)

本当、この娘は意志が弱い。

「美味しい」と言いながら晩ご飯に食らいついている。だが、少し時間が経つと、だんだん表情が微かにだが暗くなっている。食べた事を後悔しているのだ。

(何だか自業自得なのに、気の毒に思えてくる……)

自分の定位置に戻った娘は、また食べてしまった事を本当に後悔しているのか膝を抱え込んで顔をふせ、明らかに落ち込んでいる。

俺は軽やかに娘の所に行き、

「自業自得だろ」と言っただけだ。

こつちを見て、ぶーたれた顔で娘が言う。

「分かってるよ。嫌なネ」

「分かってんならちゃんとヤレよ。学習能力ないにも程があるぞ。」

「分かってるよ……」

「だいたい卑しいのに断食しようなんて考えるのが無謀なんだよ。意志弱いクセに。」

「ううう……分かってるもん……。」

「分かってる分かってるって、分かってるならちゃんとヤレよ。」

「むきやー！ー！ー！」

いきなり娘が叫んで俺をガシツと捕まえ、向き合つように抱き抱える。

「おいコラツ」と言い俺の鼻を突く。

「お前だつてダラダラ寝てるだけじゃねーか」
鼻を突いていた手が喉を撫でる。

「猫と人間一緒にするな…よ………」
気持ち良くてゴロゴロ鳴ってしまう。

「猫はいいよなあ」

俺に抱き着き娘がいう。

何を言う!!

猫だつて色々大変なのだ!! 縄張り争いだつてあるし、子孫残す為
にいい女は落とさないといけないはお前みたいな奴に気を使わない
といけないはで……

まあでもお前等よりはいいかもしれない。

グダグダと悩まなくてすむから……、

人間はどうしてこつとも引きずるのだらう……

でも、少しだけ人間が羨ましく思える時がある。本当に少しだけだ
が……

人間は好き勝つてな事を言う。

動物には理解できていないと思つてるのかもしれない。

(まったく、どうしようもない甘ったれだな……)

「お前はさあ、人間に生まれてきたんだから人間として頑張れよ。」
「え？ああうん。別に本気で言っただんじじゃないよ。ダラダラしてても怒られない、いやむしろそれでも可愛がられる猫が羨ましいだけ。」
テレビを見ながらさっきまでの落ち込みはどこにいった！？という程の呆気らさで言いやがった。

俺はブチ切れて気がついたら娘に飛びかかっていた。

「ぎゃー！！！？何すんのよチビ！！危ないでしょ！！！」

「うるせー！俺の心配返せー！！！」

「はあ？何言ってるの？」

「ぐっ……」

いつもは俺が呆れるのに、この穀潰し娘に呆れられてしまうとは……

「くそおーい！！！」

俺は無性に腹が立って娘を引つ掻いた。

が、爪が服に絡まっただけで何の攻撃にもならず、絡まった爪を取ろうにも取れず……

そんな焦った俺を見て、娘が呆れ顔で絡まった爪を取ってくれる。

俺は悔しかったので礼を言わずに立ち去ろうとしたら、
「どづいたしまして〜」と後ろから聞こえた。

(チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨ……！！！)

今日は何故か立場が逆転するはめになってしまったチビちゃんでした。

娘の誕生日

とうとうこの時が来た。

娘がまた一つ歳をとる。

なのに、この娘は未だに穀潰し……………。

もう俺は諦めかけていた。と、いつよりもう諦めている
。娘と一緒にダラダラモードだ。

午前0時になり、娘の誕生日がきた。

「わあ、私ももう26だよ。早いもんだねえ、月日が過ぎるのは
……………」

考え深げに語りだす娘。

「いやあ、人間の人生なんてあつという間だよ。食うちや寝、食うちや寝してたら時間が過ぎるのが、まあーバカみたいに早い。本当、人生も時間も無駄にして生きてるよ……………」

おめでたい日のはずなのに自己嫌悪に陥りかけている。

「まあ今日ぐらいは気にせず穀潰せよ。誕生日ってのはそういう事が許される日だろ。」

「いやあゝ…毎日穀潰ししてるのに誕生日だから特別ってのはちよつと……てか、オメデトウぐらい言つてよ」

「はいはい、オメデトウ。祝ってくれる男もいないとは可哀相だな」

「あつ！鼻で笑いやがった！！ネコのくせにいゝゝ人の事バカにしたな！！！」

「お前の事はいつもバカにしてるよ」

「口の減らないネコだな……」

呆れたように言う娘。

「お前にだけは言われたくねーよ」

バカにしたように言い返してやる。

「あ！またバカにした！！」

こんなくだらないやり取りをしているが、実は深刻な問題が発生していた。

この家の大黒柱、母親が娘の誕生日に乳癌で入院する事になったのだ。

あんな駄目な穀潰し女にこの家の母親は誕生日ケーキを買ってきたりする。

（あんな穀潰し女にそんな事してやる必要なんてないのに……）

何でも、前々から「検査に行かないと」と思いつつ面倒臭さがって行かなかつたらしい。

母親は「まさか自分が癌になるなんて思ってもみなかった」と言っていた。

（まあ、誰もがそう思うよな）

娘は大丈夫だと自分に言い聞かせていた。
母親が死ぬ事はないと――。

この感じだと何か死んだみたいだが、母親は死んでない。

乳癌で有名な病院に入院するし、たいした事ない手術だと主治医の先生にも言われて安心してたみたいだ。

だけど母親の手術の日、いざとなったら娘は凄く不安に感じたらしい。

この時に、
「絶対に母親が死ぬはずがない。大丈夫」と自分に言い聞かせていたのだ。

母親も初めての経験で怖がっていた。
その不安が娘にも移ったのだろう。

手術の終わる予定の時間より遅れた時は本気で焦ったと言っていた。
手術が無事成功して母親は麻酔で眠ったままで娘は何故か泣けたらしい。

入院生活は退屈で仕方ないが、母親は入院生活が快適で退院したくないとまで言っていた。

この時のSさん家は兄貴VS母親と娘の冷戦状態が続いていた。

(ほんとこんな時は気まずかったよ…)

娘は毎日と言っていい程母親のお見舞いに行っていた。

この時、投稿する為に漫画を描いてたがそれを放棄してまで病院に行っていた。

凄く遠い病院だったのに……。

(ニートだからできる行動)

「心配し過ぎだろ!!」と思われるかもしれないがそうではない。

母親がさみしがり屋だと分かったの行動だ。

穀潰しでダメな女だがこういう事もできる。

ある意味残念な女だ…。

母親はめきめき元気でもういつ退院してもいい状態だったが、癌は取り除いて転移してないかの検査結果待ちだった。

結果はあまり良くなかった。

娘はこの経験で、本当に人生を大切にしないといけないと思った。

母親をこのまま死なせてはいけないと……。

こんな駄目なガキ2人を必死に育てて損ばかりしている母親に、絶対親孝行・恩返しも何もせず死なせてしまったら一生後悔すると……。

(後悔ばっかの人生だから……笑)

さすがに娘も穀潰しを卒業して真っ当になるだろうと俺は思った。

……もうお分かりかもしれないが、

娘は本気で心を入れ替えて新しい自分に生まれ変わろう!!
とは思っていたが、

そう簡単に生まれ変わっていたら誰も苦労はしないのだ。

娘の穀潰しは、もう染み付き過ぎていて相当な事がない限り落ちないのかもしれない。

今も娘はあいも変わらず穀潰しだ。

いつか穀潰しを抜け出す日を夢見て俺は娘と一生にダラダラするのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372y/>

Sさん家の穀潰し

2011年12月24日07時50分発行